

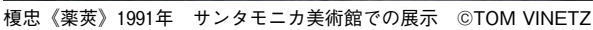
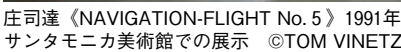
回想：「セブン・アーチスツー今日の日本美術展」

山脇一夫

1988年4月の名古屋市美術館の開館を前にして、1987年夏、ロサンゼルス＝名古屋姉妹都市委員会（LANSCA）より名古屋市に、姉妹都市提携30周年を記念して交換美術展を開催したいという提案がなされた（LANSCAは、名古屋市とロサンゼルス市の姉妹都市事業のロサンゼルス側の母体である）。そして名古屋市では、開館が予定されていた美術館がこれを担当することになった。その年10月に美術館に着任した私は、LANSCAのメンバーであり、フリーランスのキュレーターのフジナミ・ノリコさんにロサンゼルスでお会いして最初の協議を持つことになった。

「アメリカ西海岸の美術」展（＊２）につ

私たちがこの展覧会を準
のほかに日本の現代美術



私はこの二つの展覧会を視野に入れて内容やアーティストの人選を行わなければならなかった。とくに「プライマル・スピリット」展については同じロサンゼルスが会場で、し

そのコレクションされた私の作品はあるとき展示中に落下し破損してしまった。修理のため研究室に運んで状態を確かめてみると、パネル外枠は折れ、レリーフ部分などが剥離して浮き上がり、副木をするなどしっかりと補修をしなければならなかった。

山本富章 《無題》 1987年 名古屋市美術館藏



松井智恵《水路》（部分）1991年
サンタモニカ美術館での展示 ©TOM VINETZ

かも私たちよりも先行して開催される予定であったので格別配慮の必要があった。

日本の現代美術をとらえる二つの大きな視点に対して、正直言って私にはさらなる第三の視点は思いつかなかった。しかしこの二つの展覧会に取り上げられなかった中にも多くの優れたアーティストがいる。第三の展覧会としては、大きなテーマを決めずに作品本位でアーティストを選考をしようと思った。また前二つの展覧会が、比較的若いアーティストが多かったのに比べ、こちらでは1970～80年代を通じて活動をしてきたアーティストを取り上げ、しかも歴史的にではなく現在の視点で優れた作品を紹介しようと思った。

アーティストの選考は、国際交流基金とサンタ＝モニカ美術館に相談しながら行った。彼らのアドバイスはとても参考になった。

出品作家、作品

最終的な出品作家は、伊藤公象、榎忠、久野利博、庄司達、松井智恵、山口牧生、李禹煥の7人となった。全体としては二つの傾向を指摘できると思う。一つは1970～1980年代を通じて活動し当時もその活動を継続しているベテラン、中堅のアーティストたちが多かったこと。もう一つはインスタレーションの作品が多かったことである。

もともとキャリアの長い李禹煥は「もの派」を代表する作家だが、出品作品は「もの派」時代のものではなく1980年代の絵画作品とした。私はそこに彼の新しい展開を見つけていたからである。彼はその後ニューヨークのグッゲンハイム美術館で個展を開催しアジア、ヨーロッパのみならずアメリカでも著名なアーティストとして認められるようになったが、この頃はアメリカではまだ知名度が今ほどではなかった。この展覧会は李の作品をアメリカに知らせる良い機会となったのではないだろうか。

最年長の山口牧生は、李などが提唱した「もの派」の後を継いだ「ポスト・もの派」といっていいだろう。必要最小限の痕跡を残す山口の作品は西洋のミニマル・アートとの関連を思い起こさせるが、作者の表現を抑え素材に多くを語らせようとしている姿勢はミニマル・アートより「もの派」に近いだろう。ただ「もの派」と異なるのは自然に対する美意識であろう。

庄司達も、久野利博も、もの派以後の世代

のアーティストと言えるだろう。庄司は大きな布と木の棒とロープを使って壁から壁へ帆のような美しい飛行体を作った。久野はロープを円状に床に敷き詰めその周りにプラスチックの袋に砂を詰めたものを積んでいくという作品を出品した。

伊藤公象は陶を素材に現代美術を展開する個性的なアーティストである。彼は曲面を作る100以上の白い磁器片を床に広げて大輪の花のような作品を作った。榎忠も大砲やハプニングなどで活躍してきた異色の作家である。彼は米軍の演習で使われた何百個という大小様々な使用済みの薬莢を山のように積み上げた。

最年少の松井智恵は1980年代のニューウェーブで、今回の展覧会では唯一の女性作家であった。彼女の作品は寡黙な山口の作品と対照的であった。白い石膏の廊下や階段、雪の結晶の形の窓、黒い鉛の部屋、それらと対照的に美しい色の糸が吊り下げられた。様々な質感や色彩や形態によって物語を語らせようとするニューウェーブの面目躍如とするものであった。

設置、制作、交流

国際交流基金の主催事業としてこの展覧会はさらに、ポートランド美術館、ニューオリンズ現代芸術センターに巡回することになった。また基金のメキシコ事務所からの強い希望によって、メキシコのタマヨ美術館にも巡回することになった。

インスタレーションの作品が多かったのでアーティストは各会場に出かけて制作しなければならなかった。つまり、李と山口以外は、作品のパーツや材料を輸送して現地で完成させたのである。私たちは1週間ほど現地に滞在して設置、制作作業に携わった。その結果、サンタ＝モニカにおいてもそうであったが、各美術館で現地のプロフェッショナルな人々との交流と共同作業が生まれた。それが私たちに思わぬ喜びをもたらすことになった。

庄司、伊藤、榎、松井の作品は会場によって寸法、形状なども異なり、例えば伊藤はニューオリンズでは通常の円形の配置を四角形に変更し、榎はメキシコでは薬莢の山を三日月の形に設置した。とくに松井の作品は、会場の大きさや形などに合わせる必要からそのつど新しい作品のようになった。彼女の夫のアーティスト、石原友明は各会場で作品制作を助けた。

と言うわけで同じ展覧会ながら会場によって違った顔を見せて、私たちはその変化も楽しむことができたのであった。とくに私たちが味わった大きな喜びは、それぞれの美術館のホスピタリティと現地のスタッフとの共同作業から生まれたものであった。美術館は、大工仕事する展示スタッフを抱えていて、また現地のアーティストやアーティストの卵などを集めてくれていて、プロフェッショナルな共同作業ができた。日、一日と作業が進み、展示が終わり、緊張の中で開会式を、そしてオープニングパーティを迎えた。日本でもやっていることだけど異郷の地でのそれは何か特別なものがあった。美術館のスタッフやいっしょに作業してくれたアーティストたちと喜びを分かち合えるのはまたとない喜びであった。そして観客。アメリカ人もメキシコ人も率直で自由に感想を言ってくれた。観客の反応がその場で直に伝わってくるのも嬉しかった。どこの会場でも多くの観客が来てくれ

たが、メキシコの場合は特別だった。というのも、美術館は特定の人に案内状を送るのだが、チェックはいっさいしないので誰でもその日は無料で展覧会を見ることができ多くの観客が集まったのだった。

ホスピタリティ

サンタ＝モニカでは開業したばかりの全室スイートのホテルを用意してくれた。ポートランドでは美術館の友の会のメンバーの家庭にお世話になりもてなしを受けたことは忘れられない。ニューオリンズでは、地元のアーティストの招待で、榎の薬莢のように山積みになされたザリガニを食ったことは鮮烈な記憶として甦る。また美術館は開会式を祝って、当時全米を巡回していた日本の太鼓のグループ「鬼太鼓座」を呼んでくれた。

もっとも印象深かったのはタマヨ美術館であった。ここでは美術館は展示、ディスプレイのスタッフのチームを抱えていて、休憩時間となると部屋に集まり皆でギターを弾いて歌を歌った。タマヨ美術館は、彼らとガードマン以外はおよそ10数人のこじんまりした組織であった。学芸員は2人しかいなかったが、それ以外のスタッフも広報、教育、経理、管理などそれぞれの仕事分担がはっきりしていて、一つの展覧会に向かって全員が一丸となって取り組んでいた。この美術館はもっとも組織がうまく機能している理想的な美術館であると思った。

タマヨ美術館では観客向けのガイドとしてビデオが制作された。そのためアーティストも私も順番に呼び出されてラケル・ティボル氏のインタビューを受けた。彼女はメキシコを代表する美術批評家で展覧会のカタログにテキストを執筆していた。

展示も終了して翌日に開会式を迎える日にスタッフ全員とランチ・パーティをすること



セブン・アーチスツ展会場風景 サンタモニカ美術館での展示 ©TOM VINETZ

になった。なんとそれは常設展示室の中であった。和やかな親睦の中、話の流れで急きょ榎がパフォーマンスをすることとなった。スタッフはいっせいに壁の作品の警護に当たったが、何事もなくパフォーマンスは終了した。この展覧会が契機となってタマヨ美術館と名古屋市美術館との交流が始まり、その後タマヨ美術館の協力で名古屋市美術館で「ルフィーノ・タマヨ展」(1993年)を開催することができた。さらに1996年には「セブン・アーチスツ」展の第2弾とも言うべき「今日の日本美術展Ⅱ一天と地の間に」を、これも国際交流基金の共催でタマヨ美術館で開催することができた。

さて「セブン・アーチスツ」展であるが、1992年8月に帰国展を名古屋市美術館で開催した。巡回展の記録および現地のメディアの反響などについてはその折の図録(＊3)に詳しいのでここでは省略する。(美術評論家・元名古屋市美術館学芸課長)

- ＊1 「セブン・アーチスツー今日の日本美術展」
主催：ロサンゼルス＝名古屋姉妹都市委員会A、名古屋市美術館、国際交流基金、開催各美術館
サンタ＝モニカ美術館 1991年3月29日～5月26日
ポートランド美術館 1991年6月21日～8月8日
ルフィーノ・タマヨ国際美術館 1991年11月14日～92年2月2日
ニューオリンズ現代芸術センター 1992年3月21日～5月10日
- ＊2 「アメリカ西海岸の美術展」
1990年3月17日～4月22日
主催：名古屋市美術館、ロサンゼルス＝名古屋姉妹都市委員会、名古屋姉妹友好都市協会、読売新聞中部本社、美術館連絡協議会
- ＊3 「セブン・アーチスツー今日の日本美術帰国展」
1992年8月。

感想ノートから

モネ それからの100年

2018年4月25日(水)～7月1日(日)

4月25日から7月1日まで開催した「モネ それからの100年」。当館でモネを取り上げるのは実に4回目になりますが、毎回大勢の来館者の方々をお迎えしており、改めてモネの人気の高さを認識させられます。今回の展覧会はモネだけではなく、後世に与えたその影響を検証することに主眼が置かれており、作品点数も7割ほどが現代美術だったのですが、感想ノートを読むと、皆さんの関心がやはりモネに集中していることが分かります。「あこがれのモネ♡ 名古屋で見れてうれいです」「私の名前は百音(もね)です。いつかモネの絵を見たいなと思っていたので、よかったです」「最近現代美術の方がいいと思っていたけど、やっぱりモネもいいなと思いました」「モネの睡蓮は圧巻でした」等々、とにかくモネを見て感動、幸せ、という言葉がノートのいたるところに記されていました。一方で展覧会の趣旨を十分に堪能していただいた方々も少なくありません。「ど

うしても〈モネ＝印象派〉という固定観念があって、それが覆された展覧会。とてもクールでした」「現代美術で有名でも、パッと見て楽しみにくい作品が、モネを手がかりにして楽しめる」「様々なアーティストがモネに影響を受けていて、しかもその影響の受け方、視点、表現が人によって全く異なっていることが分かりました。そして影響を受けた人々の目や切り取り方を通して、モネが描きかけたものや、モネの見方を再発見したり学ぶことができました」。まさに、我が意を得たりと膝を叩きたくするような感想で、担当者冥利に尽きる言葉をいただきました。ところで、最近の名古屋の街は外国からの旅行者であふれかえっていますが、それを反映するようにノートにも英語、中国語、韓国語、さらにはベルギーを中心に使用されているフラマン語の感想まで書かれていたのには驚きました。国際化の波は確実に大きくなっているようです。最後にとてもユニークな小学6年生の感想をご紹介します。「モネは女じゃなくて男だったことにびっくりした。女じゃないと白に似たやわらかい色を出せないんじゃないかな?と思っていたから」。なるほど。先入観がないと、そんな風に色もみえるわけなんだ。(F)

展覧会 現在進行形

辰野登恵子 ON PAPERS : A Retrospective 1969—2012

2019年2月16日(土)～3月31日(日)
＊埼玉県立近代美術館で開催中、2019年1月20日(日)まで。

辰野登恵子(1950—2014)は、1970年代にグリッド(格子)やストライプ、ドット(点)をモチーフとしたミニマルな版画作品で注目を集めた後、豊潤な色彩で有機的形象を描くようになり、80年代以降の現代絵画に大きな影響を与えた画家です。版画やドローイングなどの制作は、彼女にとって単なる下絵や余技

にとどまるものではなく、キャンヴァスに描く作品と同等の価値を有し、互いを往還しながら発展を遂げるものであったことが、大量の作品群から見えてきました。これまでまとまって紹介される機会の少なかった紙作品を中心に、油彩30点を含む約220点をほぼ年代順にご紹介し、辰野登恵子の画業を検証し直す展覧会です。

この原稿は、先に開催される埼玉県立近代美術館での会期約1か月前、図録の最終校正を待ちながら、書いています。筆者に与えられたテキストのお題は「名古屋の辰野登恵子について」。彼女の制作拠点は基本的に東京でしたが、1976年から1988年頃までの約12年間は夫の仕事の都合で大阪に住み、関西や名古屋でも作品発表の機会が度々ありました。にもか

かわらず、当時の記録があまり残っておらず、活動実態がつかめていなかったのです。東京では得にくい地元資料の調査と関係者へのヒアリングによって、少しでも当地での活動を明らかにしようと試みました。その結果は…ぜひ展覧会図録でご確認ください。今回の図録は、画家が生前から準備を始めていたレジネ(作品総目録)のうち、紙作品の情報を網羅したものになる予定です。

今年6月に作品借用を兼ねた調査で長野県岡谷市のご実家を訪問した折には、美術館の年間案内に使用した作品の実物と対面し「ボジフィルムと色が全然違う…!」と関係者が肝を冷やすハプニングもありました。いったん完成と見なして撮影した作品であっても、納得がいかないと思いきった形で手を加える

ことがあったようです。画家の生前、没後を通して初めての巡回規模で行われる展覧会にどうぞご期待ください。(3)



辰野登恵子《Oct-20-95》1995年 バステル、紙
個人蔵 ©辰野剛、平出利恵子 撮影：岡野圭

郷土の作家たち

宮脇 晴（みやわき はる/1902－1985）

名古屋市に生まれた宮脇晴は、1915年（13歳）、病氣療養のために知多郡古見（現在の知多市新知）に移った。古見には画家を志していた大澤鉦一郎が同じく療養のために滞在しており、宮脇は9歳年上の大澤のもとを訪ねるようになった。後に宮脇は「[大澤]先生のことばには熱がこもり、その一つ一つは私の心眼を開かせた。少年期から青年に移ろうとする大切な時期に私は生涯変わるのではない筋金を入れられたわけだ。」と語っている＊。1917年、名古屋で岸田劉生らが草土社展を開催し、宮脇も足を運んでいる。同じ年、劉生に触発された大澤を中心とした「美を愛する」青年たちが結成した愛美社に、宮脇は15歳の最年少として参加した。結成から2年後に第1回目の展覧会が開催され、宮脇は静物画、自画像、そして母の肖像といった5点の作品を出品したことが記録に残っている。現在確認されている第1回出品作品の静物画は、テーブル、布、リンゴの質感を丹念に描写し、堅実な細密描写を見せている。もっとも身近な存在であった母千代の姿もたびたび描いた。慎ましく座る千代は口を結び、顔に

は皺が目立つ。実直に母を見つめた作品からは、宮脇の母への思慕の念が伝わってくる。名古屋市立工芸学校（現名古屋市立工芸高等学校）図案科を首席で卒業し、1927年（25歳）に愛美社とともに活動していた山田睦三郎、水野正一と「三路社」を結成。1933年（31歳）の時に春陽展に初入選し、以後継続的に出品した。画業を積んでいく過程で、単身を描いていた人物像は、母と妻、子どもと複数になり、群像も描くようになる。また画風も細密から対象物の形態を大胆にとらえた明るい色彩の作品へと変化を見せていった。母校の教諭となり後進の指導にあたり、大澤と中部春陽会を結成するなど活躍した。(I.)

＊宮脇晴「師弟愛－大沢先生と私」1964年、中部日本新聞、『生涯100年宮脇晴作品集』（2001年、名古屋画廊）収録



宮脇晴《母の像》1921年

どっがおもしろい?!

海老原喜之助《群鳥》1931年
油彩・キャンヴァス 100.0×73.2cm



今回とりあげるのは海老原喜之助の《群鳥》です。2018年4月25日から9月24日まで、常設展に展示された際に寄せられたご意見を紹介します。この期間は「モネ それからの100年」および「至上の印象派展」の2大特別展が開催されていましたので、常設展も来場者が多く、お子さんの感想もたくさん頂戴しました。

「鳥のたいぐんかいたのすごーい。数えてみると100ぴき以上?! よくいっしゅんでそんなにとらえたなんてすごいなー。」(誠司さん 11歳)
「からすがカーカー、つばめがちゅーちゅーないているのがよくつたわってきました。」(諒之介さん 8歳)
「とりがいっぱいて、なんかけんかしてるみたいだった。それも青くて白いくもながれてる。二わのとりがたくさんの小とりをうんだようなところがおもしろいです。これはハトなのかな? そうゆうなやむところがおもしろい。一わはハト。もう一わはからすみみたいなトリ。」(実玲さん 7歳)
「海にうつっている空みたいに見える。そして、その上をとりがとんでいるよう。とてもおくゆきがある作品。」(Sさん 9歳)
「1ぴきのからすだけ、おなかのあたりが赤いことにきづきました。」(茜梨さん 7歳)
「『鳥が群れている』のではなく、二羽の鳥が闘っている様子を1つの画面にコマ送りしているようにみえる。なぜなら一番大きくみえる二羽の鳥の片方の腹は赤く血に染まり、片側はこれでもかという表情にみえるからだ。」(みなともだちさん 52歳)
「鳥は普通規則正しく並んで飛ぶのに、こんなにバラバラに散っている…何か下界でおこった? 何かの前ぶれ? 気味が悪い…」(?さん 58歳)

海老原喜之助（1904－1970）は鹿児島生まれ。1923年、18歳で早くも渡仏し、紹介状を携えて、パリですでに大成功を収めていた画家、藤田嗣治を訪ねます。藤田は海老原をとっても可愛がり、海老原は親しみをこめて藤田を「オヤヂ」と呼んで師と仰ぎました。とはいえ、藤田は海老原に作品の修正や絵画技法を細かく指導したことはありませんでした。藤田は海老原の作品を見ると「ああ、ルソーか」などと他の芸術家との類似性を看破し、それ以上は何も語らなかったようです。海老原はそこから、自分だけの様式を確立することの重要性を学びました。サロン・ドートンヌへの連続入選などで徐々に頭角を現していった海老原は、1927年頃に画商のアンリ・ピエール・ロッシュとの専属契約という後ろ盾を得て、独自の作風を探求していきます。海や川岸を描いた作品から次第に青が主調色になり始め、1929年頃からは水色と白の組み合わせが美しい雪景色を多く描くようになりました。《群鳥》はまさに海老原が自分のスタイルで雪景色を積極的に描いていた滞仏後期の作品で、配色の美しさと、画面に散らばる無数の鳥による開放感が特徴的です。(nori)

島田 鮎子（しまだ あゆこ/1934－ ）

島田鮎子（1934－ ）は、東京生まれ、芸術好きの母や姉の影響もあり、幼い頃から芸術に親しんで育った。しかし少女時代は、絵画に対してはあまり積極的ではなく、むしろピアノの方に自己の表現を見出していた。高校に入学してから絵画を本格的に始めようと思い、ピアノ教師からは絵にプラスになるようにということで、ラベルやドビュッシーを課題として与えられたという。島田は「音は瞬時に消えることから、情感を定着できる絵画」の世界へと進んだとしている。

1958年には東京芸術大学美術学部油画科を卒業し、その後専攻科に学んだ。1962年、専攻科を修了し、第36回国画会展に初入選して画家として歩み始める。また、この年、東京芸術大学の同級生であった島田章三と結婚している。

1966年には、夫の愛知県立芸術大学への赴任に伴って名古屋に転居し、以来、名古屋で創作活動が続けてきた。1968年に夫のヨーロッパ留学に同行し、ヨーロッパの美術館を巡って古典絵画を学んで帰国。その後国画会展を始め幅広く活動し、1994年に愛知県芸術文化選奨文化賞、1997年に安田火災東郷青児美術館大賞を受賞している。

島田鮎子の絵画においては、画面に抽象的なイメージと具象的なイメージが混在しており、夢想と現実の狭間をたゆたうような印象

を与える。色彩は大変に美しく、独特の透明感を持っている。形と色が絶妙に溶け合い、ハーモニーを奏でるところは、彼女の音楽的素養の表れであるように思う。また、どこか日常性を持ちながらも、その抽象性により、現実から離れた世界に鑑賞者を誘うところがある。

伸びやかで洗練されて、洒落た作風は、たゆまぬ歩みが続けながらも、決して肩に力の入っていないこの画家の天分を思わせる。おそらく女性の画家としての苦労もありながら、それを感じさせない涼やかさは、観る人の気持ちも涼やかにし、ほっとリラックスさせる力を持っている。(AN)



島田鮎子《日差しはもう春》1998年

イベントレビュー

特別鑑賞会の試み 至上の印象派展

7月から9月にかけて開催した「至上の印象派展 ビュールレ・コレクション」は、最終的に21万人を超える来館者をお迎えし、当館の開館以来、入場者数で第10位の記録を打ち立てました。個人が集めたとは思えないような個々の作品の質の高さに加えて、ルノワールの《イレーヌ・カーン・ダンヴェール嬢（可愛いイレーヌ）》や、セザンヌの《赤いチョッキの少年》など、誰でも知っている名作が含まれていたことが、この結果に結びついたものと思われます。多くの方々に展覧会を見ていただけることは主催者としては大変うれしいことですが、一方であまりに大勢の方が集中されると、鑑賞環境としては問題が生じる場合も出てきます。他の人の肩越しにしか絵が見えず、ゆっくりと鑑賞できなかった、などの苦情をいただくことも少なくありません。その解決策の一つとして企画されたのが、閉館後の特別鑑賞会です。閉館後の展示室内を、有料で特定の方々に開放し、学芸員の解説付きでゆっくりと鑑賞していただくこの試み。すでに首都圏のいくつかの美術館・博物館では数年前から実施されていまし

イベントガイド

■特別展

名古屋市美術館開館30周年記念

アルヴァ・アアルト もうひとつの自然

会期：2018年12月8日(土)～2019年2月3日(日)
料金：一般1,200円・高大生900円・中学生以下無料

フィンランドの建築家、アルヴァ・アアルト（1898－1976）の大規模な回顧展。木やレンガなどの素材を用い、建築のみならずドアの取っ手や家具、ガラス器までデザインしたアアルトの温かみある作品約300点を紹介します。

【関連催事】

●記念講演会

日時：12月16日(日) 午後2時から
演題：「アアルトの住宅と理想の暮らし」
講師：和田菜穂子（建築史家）

●子どものためのギャラリートーク

日時：12月16日(日) 午前10時30分から
対象年齢：小学校3年生～中学校3年生
講師：和田菜穂子（建築史家）
※事前申込制：申し込み方法の詳細は美術館ウェブサイトに掲載します。

●作品解説会

日時：12月23日(日・祝) 午後2時から
講師：中村暁子（名古屋市美術館学芸員）
※記念講演会・作品解説会いずれも会場は2階講堂・入場無料、先着180名

●ロビーコンサート～北欧の音楽を中心に～

日時：1月13日(日) 午後3時から
会場：美術館地下ロビー 参加費：無料
バイオリン：澤田幸江

ピアノ（キーボード）：松下寛子

■常設展（特別展と同会期）

名品コレクション展Ⅱ（前期）

名古屋市美術館のコレクションから厳選した作品を紹介します。

■常設企画展（特別展と同会期）

坂田稔 —『造型写真』の行方

■コレクション解析学

日時：1月27日(日) 午後2時から
演題：^{えにし}縁をつなぐ」
2階講堂・無料・先着180名
講師：角田美奈子（名古屋市美術館学芸員）
作品：海老原友忠《田端機関庫》1972年

休館日は月曜日（ただし12月24日(月・休)、1月14日(月・祝)は開館）、11月27日(火)～12月7日(火)、12月29日(土)～2019年1月3日(木)、2月5日(火)～2月15日(金)です。詳しくは、美術館ウェブサイトhttp://www.art-museum.city.nagoya.jpをご覧ください。(よ)

この頁に掲載されている作品はいずれも名古屋市美術館蔵

展評

2018年 8 月 4 日(土)～9 月24日(日)
瀬戸市美術館

ガラス表現の今 GENーガラス教育機関ー作品展

瀬戸は言わずと知れたやきものの街ですが、ガラス工芸とも深い結びつきがあります。今夏、瀬戸市美術館では、ガラス制作を学ぶ学生たちによる作品展が開催されました。国内の13の大学や研究機関に所属する学生、教員による作品137点がずらりと並びました。日常生活でもなじみのあるガラスは、高温で液体、常温で固体に変化する可塑性に富んだ素材です。焼成の方法や温度によって、多種多様な質感を出すことが可能です。ガラスといえば、高い透光性や表面の光沢が特徴の一つ。しかし、あえて不透明な色をつくり、表面をつや消しにすることで、別の

展評

2018年 9 月 9 日(日)～10月28日(日)
徳川美術館

もじえもじ

展名の「もじえもじ」は、「文字絵」と「絵文字」を組み合わせたもの。漢字ではない平仮名での表記は、紹介する作品に見られるような造形上の表現や音で表された言葉の持つ意味の多重性への気づきを促すものとして意図されたのでしょう。日本では古くから文字と絵が密接に関わりあい、表現としてひとつの造形を作り出しています。絵のなかに文字が組み込まれたもの、文字で絵を描くもの、絵を文字のように用いて何かを表すもの。文字で描く絵が「文字絵」で、絵で描く文字が「絵文字」となるわけですが、文字と絵の組み合わせは一通りではなく、そこに多様な表現を認めることができます。徳川美術館と名古屋市蓬左文庫が主催として協力するこの展覧会は、所蔵作品に国宝、重文を取り交せて、いつも通りに堅実な内容です。時代順をほぼ追った展開は、知識や教養の問われる内容理解の難しいものから終盤に向けて華やかな衣装や頓智の効いた判じ絵となり、見る人の頭と心を解きほぐして楽しい心持ちで会場を後にすることができるものとなっていました。三重県鈴鹿市で線描による独自の抽象絵画を制作した浅野弥衛は、洋書の画集で初めて抽象の表現にふれたときのことを、「驚きは

素材と見紛うような質感が生まれます。本展では、焼しめられた陶土のように固くざらついた表面をもつ大鉢や、真っ白な石膏を思わせる作品、柔らかなスポンジのようにガラスを繊維状に焼成した作品などが目を引きました。

陶との類似性に迫った作品もありました。元来ガラスと陶には共通する成分があり、陶にほどこす釉薬（うわぐすり）はガラス質で



会場風景

なかった。能、カブキはシュールなものだし、床の間の違いダナのアンバランスだってそう。日本に昔からあったんや」と言っています⁽¹⁾。名古屋市美術館では、10月から11月の収蔵作品による常設展を「美術と文字」というテーマで実施していますが、文字が美術作品と関わりを持つのは、近代に入ってからでも、現代になってからでも、西洋から来たものでもないことが、「もじえもじ」展のような展覧会から改めて気づかされます。名古屋市美術館の「現代の美術」の主要作家である荒川修作や河原温の作品には、アルファベットではあるけれども文字や言葉が描かれており、それが「分らない」「理解できない」という思いを抱かせる原因のひとつとなっています。作品が生まれ出る背景やそれらの持つ意味と思想は異なるものの、形式においては、浅野のように、それらは昔からあったものとして驚くことでもなく受け止めることができるものです。それがそうでないのはいかなることなのかと思えた展覧会でした。(み。)

(1)「『訪問』11回目の個展を開く 洋画家 浅野弥衛氏」『中日新聞』(夕刊) 1971年 3 月13日



《隆房卿艶詞絵巻》 国立歴史民俗博物館蔵
(部分、重要文化財) 写真提供：徳川美術館

の嚆矢にあたる。

同プロジェクトは、「除染が十分に進み、一般市民が防護服なしに数百メートルの距離まで安全に近づけるようになった、事故から25年を経た未来の跡地を想定して」いる。その背景には、フクシマの四半世紀前、1986年に事故を起こしたチェルノブイリが、現在多くの観光客を集めている事例に拠る。構想によると、25年後も続く廃炉作業を見学できる原子炉建屋〈サイト・ゼロ〉から20 kmの地点に〈ふくしまゲートヴィレッジ〉を建設、同地域には原発事故博物館や大学や地方自治に関する研究施設、科学館の他、モニタメントやお祭り広場、リゾート施設、さらにはホテルとショッピングモールが設けられる。「事故の風化を防ぎ、教訓を伝える目的」を持つ本計画については、2013年9月にYahoo! JAPAN に掲載され、その是非についてアンケートが取られた。約4万7千の回答を集めたが、「賛成」は約3割に止まり、「観光地化はそぐわない」は64.9%に及んだ。つまり、「原発事故の観光地化などありえない、不謹慎だ」という意見が大勢を占めるなか、本書は発行された。実際、漂流物による〈ツナミの塔〉や全天候型のリゾート施設、さらには〈ネオお祭り広場〉といった施設計画に対しては、誤解や反発、あるいは非難さえ招くであろう。だが、同地を将来に亘って結界の外にある「辺境」としない、正しく「復興」のための一つの提案として見ることも可能である。尚、同計画研究会には、来夏当地で開催される愛知トリエンナーレ2019の芸術監督を務める津田大介氏も参加されている。(J.T.)

す。ガラスで粘土に近い質感を表現し、さらに表面に釉薬を施すことで、ガラスと陶の境界をあいまいにして見せた点が印象的でした。技術面でもっとも驚かされたのは、釣り糸ほどに細く引き伸ばしたグラスファイバーを、編み上げるように仕上げた作品です。展示台の上に散った粉末状のガラス片によって、素材がガラスとわかるものの、一見すると見事な網糸細工。繊細な糸状ガラスを扱う巧みな技術に、思わずため息がもれます。ガラスをドレスと組み合わせ、現代的で

展評

2018年10月 6 日(土)～12月 2 日(日)
名古屋港一築地口エリア一帯

アッセンブリッジ・ナゴヤ2018

名古屋市港区を舞台に繰り広げられている音楽と現代美術のフェスティバル「アッセンブリッジ・ナゴヤ」は、地域の人々と共に音楽やアートと関わり合いながら新しい文化を生み出そうという趣旨で2016年から毎年開催されている。これまで様々なプロジェクトが生まれ、アーティストが滞在制作し、人々と交流を深め、作品を展示してきた。その中心的な役割を担っていたのが港まちボトラックビルとそのサテライト的な展示空間の「ボタンギャラリー」、「つむぎ」、そして「UCO」だった。なかでもUCOは「まちの社交場」をつくるというコンセプトで、アーティストユニットLPACKによって作品としての「コーヒーのある風景」となり、まちと人々とアートがクロスする特別な場となっていた。港まちボトラックビルやボタンギャラリーでの展示を見て、UCOでほっと一息つけば、スタッフの人やアーティスト、あるいは近所の人やアート好きの誰かしらがいて、ほんのひとつきお話ししながらゆっくりすることができた。わたしにとっても名古屋における大好きな場

CULTURE,MOVIE,DRAMA&MUSIC

人形浄瑠璃 文楽 2018年10月地方公演 10月 5 日(金) 18：30～〈夜の部〉 名古屋市芸術創造センター

思い付きで予備知識もなしにチケットを取り、初めて文楽を観に行ったのは5年近く前、大阪の国立文楽劇場の初春公演でした。それまで親しんできた現代演劇の表現手法との違いに驚きながらも、三味線が織りなす独特の世界観と、太夫の語りに合わせて動く人形のしなやかで繊細な立ち居振る舞いに引き込まれていく時間はとても心地よいものでした。今回観賞した夜の部の演目は『義経千本桜』より「道行初音旅」、『新版歌祭文』より「野崎村の段」の二本です。前者では、三味線が大勢並んでフシオクリと呼ばれる華やかなメロディを弾く場面があったのですが、ライブに來たのかと見紛うほどの大迫力。出語り床に釘付けになってしまい…悲しいことに舞台の様子がほとんど記憶に残っていません。後者はドラマの要素が強く、登場人物ひとりひとりのキャラクター設定が明確で、初心者にも親しみやすい作品です。幼なじみの久松を想う田舎の娘おみつと、彼の奉公先である油屋の娘お染という二人の若い女性は、着物や髪型、かんざしといった姿形*の違いだけでなく、仕草によっても細かな性格付けがなされていました。例えば、おみつはキビキ

ユニークな感性を発揮した作品もありました。きめ細かい粉末ガラスをペースト状にし、型に詰めて焼成するパート・ド・ヴェール技法で作られたコルセットは、光を受けた泡のように繊細な輝きを放っていました。どの作品からも、ガラスのもつさまざまな表情を引き出そうとする意欲が感じられる展覧会でした。出品作品全体を見渡すと、鑄造（キャスト）による造形が大半を占めました。今後、吹きガラスによるダイナミックな造形も見られることを期待したいです。(haru)

所のひとつとなっていた。しかし、そのUCOが入っていた長屋がこの10月末を最後に取り壊しが決まったとのこと。最終日、ボトラックビルでは、LPACKによってUCOで生まれた様々なプロジェクトが紹介された会場で、UCOを改装するために行われた「空き家再生スクール」についてのトークが開催されていた。建物がなくなっても、この経験やノウハウが消えるわけではない、これからまた様々な形で展開していきたいとのことだった。最後のモーニングのイベントには、たくさんの人々が訪れ、近所のおばあちゃんがスタッフへの差し入れとともに、アーティストと歓談している姿を目にした。ここでの活動が確実に根付いていることを感じさせる一幕だった。来年のアッセンブリッジ・ナゴヤに出品する作家もすでに次の出品作の制作を始めているとのこと。ここで生まれたアートと人々と交流はまだまだ続く。これからの新しい試みもますます楽しみだ。(hina)



ビとややせっかちに動くのに対し、お染は静かにおっとり、育ちの良さを感じさせる動きで表現されます。おみつが膾をこしらえる場面では、実際に刃物で切ってみせるのですが、厚さの不揃いな大根を散らかしては客席の笑いを誘い、粗忽者のイメージを印象付けていました。こういったくだりがあるからこそ、物語後半の意外な展開に観る者は驚かされ、心動かされます。舞台にいるのが人形であることを忘れさせてしまう、丁寧で緻密な演出に改めて感じ入りました。もうひとつ印象に残ったのは物語の終え方です。髪を下ろしたおみつに見送られ、お染は舟で、久松は駕籠で別々に大坂へ去る場面で、川底に棹を取られた船頭が川へ落ちる様子や、駕籠者が途中で立ち止まって汗を拭く様、大坂へ近づくにつれ川幅が増していく様子など道中の何気ない出来事が、三味線の演奏とともに描写されます。解説には当時の野崎観音（現在の大阪府大東市・慈眼寺）参詣の様子を取り込んだものとありますが、話の余韻を残しつつも、コミカルな表現で笑いを誘い、観客の気分を少し晴れやかにしてくれました。いわば映画のエンドロール、おまけのような感じですが、これも最後まで楽しませる工夫の一つかもしれません。まだまだ知らない他の演目も観てみたいと思わせる公演でした。(3)

*余談ですが、2013年に当館で開催した上村松園展には、お染を題材にした作品《庭の雪》(1948年、山種美術館蔵/cat.88) が出品されていました。時代背景や地域に即した着物や髪型などの参考になれば幸いです。